

剣の四君子

林崎甚助

吉川英治

青空文庫

母のすがたを見ると、甚助じんすけの眼はひとりでに熱くなった。

世の中でいちばん不倅ふしあわせな人が、母の姿であるように見られた。

「どうしたら母は楽しむだろうか」

物心のつき初そめた頃から、甚助はそんな考えを幼おさなごころ心にも持った。

ふと、何かの弾はずみに、その淋はげしい母が、笑うかのような齒くちを唇くちにこぼすと、

「母上がお笑いになった」

と、その日は一日、彼も楽しく遊ぶことができた。

十二、三歳になると、そんな考えがもつと深くなつて、

「なぜだろ？」

と、思うようになった。

自分が何をした時に、母の顔が欣うれしそうになるか、に気がつきだした。

「書ほんが好く読めた時と、長柄ながえの刀で、樹がよく斬れた時だ」

少年林崎甚助は、それからよけい声を張つて良く書を読み、外へ出ては、身丈に過ぎた長巻刀ながまきを把とつて、丈余の樹こすえの梢を、跳び斬りに斬つて落した。

古い土塀門の外に佇たつて、母は時折、微笑んでくれた。

その母は、またなく美しい人だった。年もまだ若かった。名は楡葉にれはといつた。

楡葉は若後家であつた。祖先からの土豪どこうづく造りの家は、羽前の大川たいせんもがみ最上の流れに沿い、甌こしきだけ嶽ふもとの麓ふもとにあつた。山形から十里余、楯岡たておかの砦とりでから北へ一里、土称どしよう林崎という部落にあつた。

この地方一帯は、足利家の管領斯波氏しばのわかれ最上一族の勢力圏内けんであつた。甚助の父も、最上家の臣だつた。

上杉謙信の越後本庄から最上川さかのぼを溯れば、最上領東根ひがしねの砦とりで町、また、黒伏嶽くろぶせだけや高倉の山道を越えれば、一路伊達家の仙台に通じる。武強の隣藩と境を接して、連年、ここにも戦乱は絶えなかつた。

甚助は信じていた。

「わしの父者人ててじゃひとは、戦いくさで死んだのだ」

それは、父なき少年の、せめてもの誇りほこでもあつた。

ところが或る時、楯岡たておかの砦町とりでから部落へ来た馬商人あきんどの曳ひいて来た馬へ、甚助が他の少年たちと共に、悪戯いたずらすると、その中の一人の馬商人が、拳こぶしを振上げて、逃げおくれた甚助のうしろからこう呶鳴どなつた。

「この童めわっばツ。そげな悪性あくしような真似まねしさらすと、汝われが父者ててじゃのように、汝われも今に、闇討ち食つてくたばりさらすぞ」

その声は、甚助の耳より魂をつき破つた。甚助は、色あおぎめて逃げて来た。それからもう他ほかの子と遊ばなくなつた。

二

長柄ながえという武器は、戦時の用具である。平時の刀では短きに過ぎるので、いざという場合、常の刀へ、常用の柄つかより寸法の長い特殊な柄をすげ替えて、これを引つ提さげ持もちにして、戦場へ働きに出るのである。

別名、長巻とも称よんでいる。

その寸法は、およそ三尺の刀身なかみへ、二尺二、三寸の柄をつける。三尺以上の刀になれば、

それに三尺もある長柄を上げる場合もある。

林崎甚助は、天文十六年の生れで、その年少十四、五歳の頃は、ちようど永祿年間に当り、戦国の英雄が諸州に覇はを興おこした頃であつたから、長柄の流行は、旺さかんを極めて、戦場ばかりでなく、平時でも引つ提げて歩く者があつた。

織田信長は、その頃、自己の歩兵隊に、刀の長サ三尺、柄四尺という長柄を揃えて持たせて、敵陣へ突とつかん貫かんさせて、いつも敵の一陣を縦じゆう横おう刺撃しげきして駈くすけ崩くずしたということである。もつとも、それから間もなく鉄砲が渡来して全国に行き互わたつたので、後には、第一陣鉄砲隊、第二陣長柄隊というふうに、戦術の編制は變つて来たが、とにかく甚助の少年頃には、ふと物置小屋を覗のぞいても、長柄の錆さびたのが一本や二本は転がっている程だつた。それほど普及された兵具であつた。

薪まき切りに、甚助が持ち馴れたのも、父の代に、戦場から束にして分捕つて来た物のような中の一本であつた。

それも、何のためか知らないが、母の榆葉にれはから、
「枯れ木を拾うは百姓の子ぞ、そなたは、梢こすえの木を、長柄で伐おろして来やれ。長柄も背丈も届かぬ梢も、心して跳んで伐きつて見やい。それしきもの斬れねば、殿様の御馬前に立つ

て、戦いくさの場ばで人勝ひとかちりの働はたらきはならぬぞい」

と、云いい聞きかされて、七しちツ八やっ歳さい頃ころからし始はじめたことであつた。雨あめさえ降ふらなければ、日ひ課かのように、

「甚ま助まき。薪まきを伐おろして来こやい」

母はは、いいつつけた。

よく斬きれると、遠とほくで、見みている母はが微笑えいごんでくれる。それが欣うれしさに、甚ま助まきは、高たかい樹きへ、高たかい樹きへと、次つぎ第だに望のぞみを大おほく育そだてて、長なが柄えを小こ脇わきに、仰あがいで迫せまつた。

三

大おほ同どう年ねん間かんからあるという部べ落らくでいちばん古こい杉すぎ木き立たちがある。そここに熊くま野の神かみ社やしろが祀まつつてあつた。部べ落らくの名なをそのまま林はやし崎さき明あき神かみともよよんでいる。

禰ね宜ぎの山やま辺べ守もり人ひとは、時とき鳥とりや仏ぶつ法ぽう僧そうの啼なき音ねばかりを友ともとして、お宮みやの脇わきの小こさい社やしろ家に住すんでいたが、甚ま助まきの姿すがたが見みえると、かたかたこと木き履はきの足あし音ねをささせて出でて来こた。

麦むぎ餅もちや、麴こうじ餛あめなどなどつつんで、

「甚助、菓子やろう」

と寄つて来る。そして甚助の、鳥の巢のような頭を撫でて、一話するのが、禰宜の守人にとつては、一日のうちで、人間と話をする唯一な時間のようであつた。

ところが、その日に限つて、甚助は、

「お菓子、要らない」

と、首をふつて、守人をいぶからせた。

「喰べたくない」

と重ねて云うのである。

長柄を横に置いて、朽ちた鳥居とりいの下に腰をおろし、眼すら、ぽつねんと、雲へやつて、菓子を見ないのであつた。

「そうかい」

守人は、強しいなかつた。

顔をのぞいて訊ねた。

「甚助。どうかしたのか。この頃は、樹の梢へかかつて、見事に枝を伐おろす姿も、ちつとも見かけないが」

「おじさん、どうしたんだろ」

「わしが訊いてるのだよ。どうかしたのかと」

「おらにも分らない。——この頃は、いくら樹へかかっても、今までは切れたぐらいな高さの梢も、急に斬れなくなってしまった」

「それはふしぎだな」

「だから、もう、樹を伐るのは、嫌いやになった。……だけど、伐きって見せないと、おつ母さんが、笑わらってくれない」

「甚助、おぬしももう、十四だな。この頃は、よその子とも、遊あそばぬのう」

「つまらないもの」

「考え事が胸にでき宿やどり始めたのじやろ。何か、人にも云えぬ考え事が」

「ああ、無いこともない」

「そのためだ。わしに話してごらん」

「神かん主ぬしさん」

甚助は、ふいに立って、守人もりとの胸へ、抱きついた。しゆくしゆく泣き出したのである。

「なんだ、なんだ、男のくせに」

「おらの……おらのお父さんは、戦で死んだのじゃないのかい。神主さんは、年老っているから、おらが嬰兒の時分のことでも知っているだろ。話して、話して。よう、誰にもいわないから、俺にだけほんとのことを話してよう……」

守人も、眼を上げていた。

麦がよく伸びる頃の昼間の月に、禽の音が澄んでいた。

四

禰宜の守人に連れられて、甚助は、家へ戻った。

守人から何か聞くと、彼の母は、いつにない改まった眼で、わが子を見、

「口を嗽ぎなさい。手を洗っておいでなさい。そして、お仏間へ来るがよい」

と、云った。

甚助は、云われた通り、身躰みを作つて、後から仏間へ行つてみると、母と守人が寂として坐っていた。

御先祖の壇には、御灯があがっていた。

「きよう初めてはなすが、真まことは、其方そなたの父は、人手にかかつてお果てなされたのです」

母は、水のような声で、子に告げた。泣いてもいかなかった。しかし、泣いている以上なものを、甚助は、その母の眼に見た。

それきり多くを母自身は語らなかつた。

若くて美しかつたその頃の彼女自身が、良人の横死の一原因であつたせいもあろう。

が、あらましは、事情に詳くわしい守人もりとが、噛かんで啣くめるように聞かせてくれた。甚助が生れたその年のことだというから、天文十六年のことにちがいない。

坂上主膳さかがみしゆぜんという武士のために、楯岡たておかの藩祖の菩提寺ぼだいじのすこし下手町しもの辻で斬られたのであつた。原因は意趣いしゆ、その詳つまびらかな事實は、おまえがもつと大人になれば自然分つてくる。母御もまた、話す折があらうと、守人は云つた。

「わかつたか」

「わかりました」

甚助は、そこでは泣かなかつた。

青白い栗の花が咲いている厩うまやの横たたずに佇たんで、独り眼を横にこすつていた。父の林崎重しげな成りが乗用したという馬も老いて、数年前に死んでいた。

五

元服したばかりの十五の甚助は、ひたむきに、何ものかを求めて、旅へ立つた。勿論、母のゆるしを得て。

世間も知らないそんな若冠じゃっかんの子を遠くへ見送るのに、当時の若い母親は健気けなげであった。しかも戦乱に次ぐ戦乱の世であった。

その年はちようど川中島かわなかしまの大戦の翌年であった。

「大胡おおこのお城はどこですか」

上州へ来た甚助は、その城主、上泉伊勢守秀綱かみいずみいせのかみひでつなをさがした。

「お城はないよ」

土地の者は云った。

「伊勢守様も、もう都の空だよ。大胡城は去年、上杉勢に攻め落されて、石垣と焼け木杭いしか残っていない。そこに今あるのは、上杉家の侍衆さむらいしゅうのお陣屋さ」

こう聞いて、甚助は空しく、常陸国ひたちのくにへ志した。大永年間の人で、鹿島神流の中興の祖

松本備前守を初めとして、天真正伝神伝流の開祖、飯篠長威斎もすでに遠い古人であるが、常陸の産であると聞いている。近くは、土地の土豪、塚原土佐守ト伝が、そこに住んでいると聞いている。

だが、訪ねて行ってみると、そのト伝も、

「御遊歴中」

とて、留守であつた。

戦雲の世には、人も雲のように、諸国を去来していた。武芸者はわけても旅が生活だつた。修行は遍歴にあつた。

伊勢守秀綱とか、土佐守ト伝とかは、たとえ野に在つても、土地の豪族なので、弟子郎党など四、五十人も召連れて、小姓の拳に鷹をすえさせ、乗更馬など美々しく曳かせて遊歴した。

しかし、笠一つ、劍一腰で、時雨に会つても、乾す着更えさえも持たない武芸者もある。雑多な時代の流れの中に、甚助も、一つの色だった。誰も怪しみはしなかった。この若冠な小修行者が、父の復讐を念じ、将来の壮志を抱いているとは誰も見なかった。

四年経つて帰つて来た。

母の顔は、同じだった。

すぐ禰宜ねぎの山辺守人やまのべもりとが来た。家を立つ時と同じように、仏間に坐って、母と守人の前に手をついた。

「御修行は積んだかの」

母が訊たずねた。

「四年だけのことは致して参りました」

「仇かたきの消息は」

「ほぼ知れました」

「どこで見届けました」

「母上が仰せられた通り、やはり京都に住んでいました。松永久秀殿の御内みうちに潜ひそんでいるらしゅう思います」

「頭門けんもんに隠れていたのでは、近づく術すべもないと思うて、故郷くにへ帰って来られたか」

「いいえ、坂上主膳さかがみしゆぜんへ出会うのは易やすいことです。けれども強豪主膳を討つことは、決してたやすくはございませぬ」

「まだ、腕うでに、確しかと自信はできぬとお云いか」

「敵に勝つにはまず、敵を知るにであると申します。坂上主膳は、その後、京都に遁れてからも、風評のよくない男ではありませんが、彼の武勇は、松永久秀が珍重して召抱えたので分ります。先つ年、久秀が室町の御館を襲うて、將軍義輝公を弑逆し奉つた折なども、坂上主膳の働きは、傍若無人な戦ふりと云われております。いわゆる彼は悪人ながら、最上家にいた頃から鳴っている通り千軍万馬の士です。なんで甚助のような小冠者の細腕にようこれを仆すことができましょうか」

母は、子の言葉に、またたきもせぬ眼をして聞いていた。

守人は、

「ううむ。成人したのう。やはり旅の風は人の子に世を歩む道を誠えてくれる」と、云つて呻いた。

六

永禄十一年、彼が二十二歳の春だった。その二月中旬頃から、五月末までの間、まる百カ日、彼は家に寝なかつた。また、帯を解かなかつた。

林崎明神の神殿の辺りは、真昼、木洩れ陽がすこし映す時の他は、昼も暗かった。守人の住む社家の勝手元には、黄昏れると、一椀の粥が出されてあつた。それが甚助の食事であつた。夜が明けると、また一椀、盆にのせて出されてある。

守人は、姿を見せない。努めて見せないことにしていた。勿論、母の楡葉も、ここへは近づかなかつた。

ここは今、熊野権現の聖地であると共に、林崎甚助にとって、生死を超脱した劍の道場だつた。

彼は、百日の参籠を誓願したのだつた。

朝夕一椀ずつの粥を守人から恵まれる他、何も口にしなかつた。七日、二十七日は、まだまだ鋭気もあつたが五十日、六十日となると、肉は落ち、眼は澄み、皮膚は垢を持ちながら蟬のように白くのみあつた。

——喝アつ。

——ええおうつ。

異様な声が、杉木立に響した。

月の晩も。風の昼も。

——えやーつツ。

神殿の広ひろ前に、彼は、三尺余もある長刀を、革紐かわひもで帯にくくし、われとわが影を、月の白い地上に睨にらんでいた。

革紐の帯をなであげて、左手ゆんでが、鯉こい口にぐちふれる。右手めてが、軽く柄つかをうつ。

瞬間。

上体が折れる。満身の毛穴から、喉のどを破やぶつて、声が発はしる。

一揮き、風を断たつ。

その時はもう、風か影か、空を一颯さつした大刀は、彼の腰間の鞘さやに吸すわれているのだった。肉眼では、その間の剣かんのうごきは、見て取れないくらい迅はやかった。

この行ぎようを、彼は、暁ぎようてん天から夕ゆいまで、また、宵よいから深夜まで、一日何百回、行の熟達じやくたつにつれて、何千回もくり返して行いつた。

疲れれば、拜殿の破れ廂ひさしの下にある、一枚の蕙むしろうの上に、身を横たえた。眠りから醒める
と、すぐ大地に立たつた。

日の出るたびに、傍かたわらの大杉の幹へ、一太刀、刀痕を入れた。その刀痕の数が日の数であつた。

世上良師多し。

世せ転てん縹ひょう渺びょうの間かん

師縁求めて求め難し

如しかず直ただちに神しんに会わん

上泉伊勢守を訪ねて伊勢守に会わず、塚原土佐守を訪ねて土佐守に師事し得ず、その他、
当代著名の人、富田勢源、戸田一刀齋などの、高名を慕い、住居を追う間に、いつか四年
の歳月を空しくした甚助は、
翻ほん然ぜん、

——直ちに神に会わん、

と、悟さとつたのであつた。

自然は皆師みなしだ。一冊の書物に師となることばがあれば、一木一草にも師となる声はあろう。そう考えて、彼は自嘲の一詩を旅の記に賦ふし、故郷ふるさとの産土神うぶすながみの前に額ぬかすき、嬰児あかごにかえつたような心で、

「我に、前人未踏みしとうの劍の極理を授けたまえ」

と、すがつた。

彼の誓願は、

「人の末流を汲まんより、われ自ら一流みずかの祖たらん」
というにあつた。

諸国の劍人の実状を見、また、いよいよ劍磨けんまの時代の必然を、社会に視て来たからであつた。

勝敗は髪一すじである。

間まの遅いか速いかで勝敗はすでに決する。

劍のあつかい、間あい、心胆しんたんの工夫をした達人は尠すくなしとしない。

けれど、勝負に立つ、まず間髪の勝目を電瞬にとる工夫をした者はかつてない。

刀とうはすべて鞘にある。

刀が鞘を脱する時、勝負はすでにつきかけている。いや、勝目を掴つかむ機おりがあるはずである。

抜刀の法だ。練磨れんまだ。

それを研究しよう。究めて神しんに入り、その極理を掴つかもう。

甚助の誓願にかかった端緒たんしよは、実にそこにあつた。

初め、木の皮も喰いたいような飢餓きがに襲われた。それがやむと、時折、胃ぶくろが暴れて苦悶した。それに馴れると、妄念もうねんが起つた。肉体の疲労が、自分の踏む足にもわかつた。そこを超えると、自己が分らなくなつた。

五、六十日頃から、ようやく、

「苦行のかがあつたか」

と思われるように、頭脳は冴さえ、心は清澄に、技わざもわれながら、見事になつて来た。しかし、それは、技のみであつた。

「心は？」

と、訊ねてみると、空漠くうぼくだつた。何も得てない気がした。

「これでいいのか」

迷い出した。一心不乱がみだれかけた。壁に突き当つたように技も進まない。われとわが身がふがいなくなつて死にたくさえなつた。

そこを超えて、

「何を」

と、魔とも人とも思われぬ形ぎようそう相なになつた頃、大杉の幹の刀痕は、九十を超えてい

た。

「もう百日」

とも思わなかつた。甚助は発狂していたかも知れないのである。一刀、一刀、また一刀、空を斬つては鞘におさめる時の凄まじい彼の気合は、もうしゃ噎れ果てて、何ものか世にあり得ない野獣の咳声のようだった。喉はやぶれ手足は血によごれていた。百日も櫛を入れない髪には落葉の骨がたかつていた。雨露にまみれた袴、小袖、それも傷ましく綻び果てている。そこからかなり距てている甚助の家へまで、近頃は、夜になると、最上川の水音より明らかに、彼の狂わしいしゃ噎れ声が響いて行つた。楡葉は、共に寝なかつた。いや遂には、

「百日の間は顔を見せぬ」

と、子へも、守人へも、固く約した事も制しきれなくなつて、守人の家まで忍んで来ていた。しかし、守人は、

「今あなたが、甘い涙などそそいだら、あなたは何のために、甚助どのを、あそこまで、きつい心で育てて来たか、意味のないことになりましたよ」

と、窓を閉じて、固く一室に止めた。

それでも彼女は、破れ戸の隙間すきまから、時折、彼方かなたを窺うかがったり、耳をすましたり、悶もだえていたが、そのうちに、何思ったか社家の裏から馳け出して、最上川の畔ほとりに、衣をぬぎ捨て、月よりも白い肌、烏羽玉うばたまより黒い黒髪を、怯ひるみもなく、川水に浸ひたし、また川水を一心に浴びて、そこから見える神居かみいの森へ、夜もすがら、掌てのひらをあわせていた。

まだ五月の末だったので、川水は冷たかった。溪谷の奥ふかくには雪さえ残っている頃である。彼女は、凍こごえたまま、仆たおれていた。夜の白んだのも知らなかった。

同じように。

その夜明け頃。

甚助も、大刀を持ったまま、熊野権現の前に、平べつたくなっていた。完全に呼吸もしていなかった。肌も、死人のような色をしていた。

陽がさし昇った。

巨おお杉すぎの梢から金色の雫しずくが、甚助の背へほとほと落ちた。美しい毛艶しんあの神鴉あが、ふた声ほど、高く啼ないた。

「甚助どのの母御が、最上川の水に浸って、気を失うてござらっしゃる」

かわおかわおううらい
河往來の船子たちが知らせて来た。それはちようど、朝の粥かゆを炊たいて、守人が、神殿

の前に仆れている甚助の姿に気づき、驚いて、手当をしていた時だった。

幸いに、二人とも、蘇生そせいした。元より母の榆葉にれはのほうが恢復かいふくは早かった。榆葉は気がつくと、寝食も忘れて、子の枕元に坐つたきりだった。

甚助も日ならずして恢復した。

床とこを払って起きた日に、彼は、身の垢あかをそそぎ、衣服を更かえて、

「母上、一緒に行つて下さい」

と、云つた。

「どこへ」

「神前へ、お礼詣まいりにです」

榆葉にれはは頷いた。そして心密ひそかに、わが子が百日の参籠とあの精進の結果、何ものか神靈

の示頭しげんを得て、志す剣の工夫のうえに、一つの光明を掴み得たにちがいないと思つた。

「守人様もりと、神灯みあかしをお願いいたします」

社家へ声をかけると、守人も来て、神前に菅すが菴むしろを展のべ、母子おやこの坐つた端へ、自分も

共に坐つて、拍手かしわでをうち鳴らした。

「……………」

祈念をこめて、神へ心から額ぬかすき終つて後、榆葉は甚助へ問うた。

「何ぞ、神さまの、御靈現みしるしをうけたかや」

「いいえ、べつに」

「百日のあいだに、何もなかったかの」

「八、九十日から先は、一切夢中でございました。何も覚えませぬ。精も力も尽き、昏こんこ々と仆れて夢中の霧につつまれたように氣を失つたのが、ちょうど百日目の暁あけがた方でございまして」

「それだけか」

「それだけです」

母はやや失望の色を泛うかべた。けれど甚助の胸には、口で言い現し難い何ものかが実は宿っていた。けれどそれを説明する言葉がなかった。

「行つて参ります。——母上、もう一度お暇を下さい。こんどは、坂上主膳へ出会つて参ります」

数日の後、彼はふたたび、旅へ立った。腰間ようかんの一水は、伝家の銘刀来信国らいのぶくにの三尺二寸という大劍であつたという。

京都へ上るその途中だった。やがて木曾路へも近い一夜、信州岩村田の土豪北山半左衛門の家に泊った。

「お客様、逃げて下さい。はやく、はやくたいへんです」

まよなか
真夜半のことなのだ。

あるじ
主の子息北山半三郎が寢室へ来て、甚助をゆり起し、顫きながら云うのだった。

「——茨組いばらくみがやって来ました。木曾の宿々から善光寺いったいを荒して廻る茨組です。家財や金さえ攫さらつてゆけば立去るでしょうが、お怪我があるといけませんから」

茨組という名は、街道いたる所で甚助も聞いていた。応仁の乱以後、室町幕府の紊ぶんらん乱につけこんで、京都に簇そうしゆつ出した浪人くずれの無頼者ならすものの一団である。

しかし、その京都や浪華ななわでも、近頃は取締りが厳しくなった。近畿や地方の都会でも、信長とか、朝倉家とか、徳川家などの武将が、自己の領政に厳密な改正を加えている折なので、浮浪人や暴徒の横行する世間はだんだん狭められていた。

で、自然、武將の勢力や統治の行き届かない片田舎へと、茨組などいばらも流れて来た。同時に彼等の持前とする殺戮さつりくと兇暴な質たちも、野に返った野獸と同じで、とても人間の仕業しわざとは解し得ないことを平然とやって歩いた。

「お静かになさい。騒ぐことはありません」

甚助は、信国のぶくにの一腰を横たえて、裏戸を開け、塙かきを躍おどつて、表の土塀門のほうへ迫つて行つた。

信濃の名物という月がその晩も煌こうとして中天にあつた。外から窺おのぞつてみると、大槌おおづちや棍棒こんぼうで打ち壊したらしい門内へ、およそ三十人ばかりの賊がなだれ込んで、土蔵を破壊し、全家族を縛くくし上げ、手燭を持ち廻つて、大がかりな掠奪りやくだつにかかつている様子であつた。

どんな人間どもかというのと、その頃の世相を見て書いた「室町殿物語」に依ると、茨組の風俗をこんなふういばらに写してある。

ソノ装束ハト見レバ、茜アカネソメ染ノ下帯、小玉打コダマウチノ上帯ウハナド、幾重ニモマハシ、三尺八寸ノ朱鞞シユザヤノ刀、柄ハ一尺八寸ニ卷カセ、ベツニ二尺一寸ノ打刀モ同ジ拵ヘニテ仕立テ、ソギタテ鏢ヤリ、搔持カイモテルモアリ、髪ハ搦ミ乱シテ、荒繩ノ鉢巻ナドムズト締メ、熊手マサカリ、鉞マサカリナ

ド前後ヲカタメ、常ニ同行二十人バカリニテ押通ルヲ、「アレコソ、当時世ニ聞ユル茨組
 ゴ。辺リヘ寄ルナ、物言フナ」トテ人々怯ヂ怖レテ道ヲヒラキケル。

悪党でも派手を誇る時代だったから、それは洛内の見聞であつたろうが、いずれはそん
 な部類の雑多な扮装ふんそうをしていたにちがいない。それと武器は流行はやりの長柄が最も多く、槍、
 山刀、鉞まさかり、槌つちなども持ち歩いていたらしく思える。

やがて屋内の悲鳴や物音が少しやむと、その寂寞せきぼくの中から、三人、四人と外へ出て来
 た。目ぼしい家財を担いで来るものもあり、金や女を盗んで戯たわむれながら、出て来る男もあ
 った。

甚助は、ふいに、前へ立つて、

「待てつ」

と、云った。

待て——と聞えた時はもう、彼の太剣の左右に、二つの死骸が一度に薙なぎ仆たおされていた。
 仰天して逃げ込もうとした男も一名は後ろ袈裟けさに、一名は腰ぐるまを払われて、醜い胴を
 地へ転がした。

刀を拭ぬぐつて、また待った。

次の三人も、一颯に斬った。

甚助は、心で、

(母上。これです)

と、叫びたかった。

林崎明神の神前に額ぬかすいて、母から、百日の参籠と精進のうちに、何か、神の御靈みさとし現はなかつたかと問われた時、云い現わすべき言葉がないので、

(べつに、何も覚えませぬ)

と答えたが、その云い現わせないものを、彼は今、紛まぎれない事実の上に、また、無意識な行動の上に、間違まちがいなく自己の相すがたとして、現わしていることを思ったのであった。

「何だ？」

「どうしたと？」

門外の異変に気がついて、茨組いばらの総勢一かたまりとなって、やがて甚助の前後へ、真つ黒に躍りかかつて来た。

信のぶくに国の刀は、月下に十数箇の死骸を積たみ、大地を碧あおい血に光らせた。

かなわじと余の者は怖れて逃げたが、その騒動も片づいて、翌日、北山家を辞し去った

彼を、道に待つていたらしいその夜の茨組の男三名が、

「しばらく」

と、並木の蔭から呼びとめた。

九

呼び止めた男は、茨組いばりの沼沢甚右衛門、葦沢あしざわ弥兵衛、桜場さくらば隼人はやとなどだった。見れば大地へ姿を揃えて平伏している。そして誠意を示して云うのだった。

「御門下の端はしに加えていただきたい。——とお頼り申すからには、今日以後、悪行を止めやて完まったき武士となるよう志すことを、三名、神に誓い申しての上でござる」

甚助は、乞こいを許した。しかし、誓約ちやくに止めて後日の再会を約し、なお行くと、また彼を追つて来た者がある。岩村田の近郷に住む田宮平兵衛という郷士だった。

「願わくば拙者をお弟子として伴つれ給え」

切実な願いなので、田宮だけは供にした。やがて京都へ着いた。そしてあらゆる苦心と手引を経て、松永久秀の幕下ぼくかにいる父の讐しゅうてき敵坂上主膳と出会うことができた。

主膳を斬つた際も、信国の鍰つばが、彼の手に鳴つたせつな、実にただ一刀しか費つひやされなかつたということである。唯、遺憾ながらその場所や、当時の実状など、史録には明確を欠いている。

居合いあいという言葉は、後世にできた称よび方であろう。彼の創始した拔刀法——後に称よえたところの林崎夢想流むそうりゆうとは、純正剣道の一流であつて、本流の劍に、劍とは不可分な拔刀の神息をふきこんだものに他ほかならないのである。

彼に隨身した田宮平兵衛は、後に、

——柄つかに八寸の徳、みこしに三重じゆうの利。

という有名な居合の名標語を吐いた人で、抜刀田宮一流の別派を興し、当時の達人ともいわれて、林崎夢想流塵下きかの第一人者と目されるに至つた。

また、茨組いばらから脱した沼沢甚右衛門は、常陸ひたちの真壁まかべに、葦沢あしざわ弥兵衛は武州牛久在うしくざいに、桜場隼人さくらばはやとは三州拳母村こうもに、それぞれ一道場を持つて大いに道風を興したとある。

なお、林崎甚助自身は、各地を遊歴して、自然、門流のひろまる一方、後年またさらに、鹿島神宮の武林ぶりんに入つて、天真神道流の研鑽けんさんに身をゆだね、元龜何年かには、越後の上杉謙信の幕将、松田尾張守に隨身して、戦場をも馳駆したらしいが、謙信の歿ぼつご後は、杳ようと

して、その足蹟も定かでない。

晩年は奈良に住んでいたという説もあるし、鹿島で終ったという説もある。五十何歳かで郷里林崎で病歿したともいわれている。いずれにしろ半生は確説もない。しかし、彼の林崎夢想流は、不滅の光芒こうぼうを遺のこして行つたし、その誕生の森、林崎明神は今もそのまま現存している。

夢想と流名とに称とえても、彼の百日さんりゅう參籠さんろうには、何らの奇蹟的なはなしも伝えられなかつた。けれど奇蹟のないところに、彼の真実な魂の神化があつた。肉体を百日の精進に燃えきらして仆れるまでに至れば、ひとり林崎甚助しげのぶ重信しげのぶのたましいばかりか、誰の精神でも、どんな道に於ても、神の夢想をつかむことができよう。

「甚助。ようしやつた」

彼の母は、京都から一先ず帰郷した甚助を迎えて、初めて、心から綻ほころんだ笑え顔を子へも見せたらうと思われる。

「生涯の満足は今だ」

母の一笑に、甚助もまた、そう思つたにちがいない。だが、若くして美しかった楡葉にれはは、亡夫の讐しゅうえん怨えんを子の討ちはらしてくれた報告を聞いてから幾いくとせ年もなく、病の床につい

て世を去った。

甚助重信が、孤劍、白雲の人となつて、郷土を離れたのは、そのためであると云われている。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「講談倶楽部 一月号」大日本雄弁会講談社

1940（昭和15）年1月

※初出時の表題は「日本剣人伝（一）林崎甚助」です。

入力：川山隆

校正：岡村和彦

2014年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

剣の四君子

林崎甚助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>